北海道哲学会『哲学年報』65号（2019年）

《シンポジウム―人生の意味―》

人生の意味における部分と全体の予備的考察

森　岡　正　博
（早稲田大学人間科学学術院）

1　はじめに

2017 年 7 月 23 日に北海道大学で開催されたシンポジウム「人生の意味」において、私は「人生の意味への独在論的アプローチ」と題した発表を行なった。本稿ではその発表内容を簡単に紹介した後に、人生の意味における全体と部分の関係について若干の考察を行ないたい。当日の発表では、人生の意味と独在論の関係についてもっぱら語ったが、その内容についてはすでに『現代思想・総特集・分析哲学』（2017 年 11 月号）で書いたので、本稿では軽く触れるにとどめる。

2　人生の意味の担い手は誰か

サディアス・メッツは、「人生の意味 meaning in life」を、「超自然主義」「客観主義」「主観主義」の３つに分類する。そしてこれらのうち、客観主義の人生の意味論をもっとも妥当なものとしている。客観主義とは、人生の意味は客観的に決まるとするものであり、ある人の人生よりも別の人の人生のほうがより有意味である、ということが言えるとする立場である。これに対して主観主義は、人生の意味は主観的に定まるのであって客観性はないとする。だが、そうすると、たとえばヒトラーの人生もまたヒトラー自身によって有意味とされる可能性があり、我々はそれを認めなくてはならなくなるが、それはおかし

いだろうというわけである。メッツ自身は、やや主観主義寄りの客観主義である「基盤主義理論 fundamentality theory」を提唱している（Metz (2013)）。

しかし、私はこれに逆らって、主観主義をさらに突き詰めた「独在主義」の人生の意味論を提唱する。それは、人生の意味には、人生を生きる当人によってしか知ることのできない「人生の意味の中核部分 the heart of meaning in life」という層があり、その層は他の何ものとも比較することができないとする。そしてこの層の人生の意味を担うのは誰かということであるが、これはこの文章を読んでいるあなたであり、この二人称確定指示によってのみその担い手を指し示すことができる、とするのである。人生の意味論は、ここにおいて、永井均、入不二基義、私によって議論されてきた独在性と現実性の哲学的問題に接続される（拙論(2017a)）。人生の意味論こそが、独在性の哲学がもっとも豊かに開花する領域である。独在主義の人生の意味論は、これまでの分析哲学において論じられてきたことはおそらくない。

3　人生の意味は何を意味しているのか

本稿ではさらにその先に進んで考えてみたい。それは、「人生の意味の中核部分」における「人生の意味」はそもそも何を意味しているのかという論点である。これについても『現代思想』論文で考察したが、本稿ではそれをさらにもう一歩進めたい。まず「人生の意味の中核部分」における「人生の意味」には、(1)「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」という意味と、(2)「私の人生の中に位置づけられた出来事の意味」という意味がある。英語圏における「meaning of life」が前者に緩く対応し、「meaning in life」が後者に緩く対応すると考えられる。

ここで、そもそも「意味」とは何かを考えておかなければならない。私は、部分が全体の中に肯定的に組み込まれたときの、その組み込まれ方のことを「意味」と呼ぶのだと考えている。すなわち、意味とは、部分と全体のあいだの肯定的な関係性のことである。そのような関係が成立しているとみなされるときに、部分や全体は意味を持つ。部分と全体の肯定的な関係性は、それらが

物語的な次元に置かれることで成立する。「肯定的」とは「よかった」ということであるが、部分が全体の中にこのように位置づけられてよかった、というのはひとつの物語である。意味は、物語の次元で成立すると私は考えている。これを、独在的存在者である私の人生に当てはめてみよう。(「意味の意味」一般については言語哲学などで議論が重ねられてきており、また人生の意味の哲学においても議論の蓄積があるので、それらを紹介検討しなければならないのだが、本稿では紙幅の制約のゆえにその作業は省略し、他の論考での課題とする)。

まず、(1)「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」について考える。これは、「私の人生」が、それより大きい何かの一部分として肯定的に組み込まれるときに生まれる「人生の意味」である。私より大きな何かとしては、家族、血統、組織、社会、国家、伝統、自然環境、宇宙、超越者などがあり得る。『現代思想』論文で私はこれを、「私が肯定的に評価する私の外部のものへと、これまでの私の人生の全体が、かけがえのないひとつのピースとして肯定的に組み込まれることが、意味のある人生の内実である」というふうに書いた(拙論(2017b)、104 頁)。私の人生に即して考えたとき、私の人生がそのようなものとして全体に肯定的に組み込まれたかどうかは、私の「実感」によって判断される。したがって、「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」を最終的に担保するものは、私の「実感」である。これまでの私の人生の全体が、より大きな全体へと肯定的に組み込まれたと私が実感できること、これが私の人生の意味であるということになる。このときに、私の人生がより大きな全体へと肯定的に組み込まれたという実感を持てるかどうかは、その大きな全体からの「承認」があるかどうかによって変わってくることがある。これについては後に述べる。

次に、(2)「私の人生の中に位置づけられた出来事の意味」について考える。これは、私の人生の中で起きたある「出来事」が、これまでの私の人生の全体を織りなすひとつの部分として肯定的に組み込まれたときに生まれるところの、「人生に起きた出来事の意味」である。たとえば、人生のある時点で私が大き

な失敗をしてしまったとする。その出来事に意味があるなどとはけっして思えなかったのだが、その後の人生を生きていくうちに、あの出来事があったからこそいまの自分があるのだというふうに心から思えるようになってきたとき、その出来事はこれまでの私の人生の全体を支えるひとつの部分として肯定的に組み込まれたのである。いまから振り返って、あの出来事は、これまでの私の人生の全体を肯定的に捉えることを支える重要なパーツとして存在しているという「実感」を私が持つことができるようになったとき、その出来事は私の人生の中で意味を持つと言えるのである。

これをさらに敷衍して言えば、私の人生の中に位置づけられた出来事は、それ単体で意味を持ったり意味を持たなかったりはしない。その出来事が意味を持つとしたら、それはかならずこれまでの私の人生の全体に組み込まれてはじめて、意味を持つのである。これは、人生の部分的な出来事は、それ自体として意味を持ったり持たなかったりするという立場の否定である。また、先ほどの例のように、その出来事が起きたときにはそれを否定せざるを得なかったが、その後の人生を生きるうちに、その出来事の意味が正反対に変わってくるということがあり得る。これは「人生の意味」の不思議な論理であると言える。この点については、拙論（2011）で論じた。さらには、「人生の全体」をどう捉えるかという論点がある。一般的には、人生の全体とは私が生まれてから死ぬまでの全体のことであるとみなされることが多いだろう。しかしながら、私の人生内在的に見てみれば、いまの私から振り返られた人生は、つねに「これまでの私の人生の全体」である。それは私がまさに死のうとしているときにおいても成立する。すなわち、死に直面していないときであっても私は「人生の全体」を語ることができる。それは「これまでの私の人生の全体」を意味する。また、部分が全体の中に肯定的に組み込まれるとは、部分が一種の反面教師として組み込まれることをも含んでいる。もう二度と繰り返されてはならないものとして、私の人生に刻み込まれたとき、その部分は肯定的に組み込まれたと言えるのである。

さて、ここでふたたび、「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」と「私

の人生の中に位置づけられた出来事の意味」に戻ろう。後者の場合、「人生の出来事」が部分であり、「これまでの私の人生の全体」が全体である。そして部分である「人生の出来事」が、全体である「これまでの私の人生の全体」の中に位置づけられる。そしてその位置づけが肯定的になされたと私が実感するときに、その人生の出来事は、これまでの私の人生の全体の中で意味を持つのである。このとき、その部分としての「人生の出来事」は、「これまでの私の人生の全体」という全体の側から、肯定的に位置づけられるのである。そして、それまでは否定的に捉えられていた人生の出来事が、これまでの私の人生の全体の中で肯定的に位置づけ直されるとき、その部分の肯定が人生の全体の隅々にまで広がっていって、これまでの私の人生の全体を肯定的なものへと変化させるということが起こり得る。部分である「人生の出来事」の肯定と、全体である「これまでの私の人生の全体」の肯定は、このような形で互いにつながり合うことができる。（森岡（2016）で、私は、人生の破断と、破断を導いた出来事と、人生そのものの３つの次元を区別して、このことを論じた）。

では前者の「全体の中に位置づけられた私の人生の意味」においては、このダイナミズムはどういう形をとっているのだろうか。たとえば、私の人生の意味が、国家という全体の中に位置づけられる場合を考えてみよう。もし私が国家という全体の位置に立っていたとしたら、私は国家の部分である私の人生に対して、それを肯定するとかしないとか言うことができるだろう。それはちょうど、私が「これまでの私の人生の全体」の位置に立って、部分である「人生の出来事」を肯定するときと同じ構造になるはずである。ここには、全体が部分を肯定するという構図がある。しかしながら、実際には、私は国家の立場に立つことはできない。であるから、私が国家の立場に立って、その部分である私の人生を肯定するとかしないとか言うことはできない。国家という全体に対して、私の人生はその部分でしかなく、私にできることと言えば、「国家によって私の人生が肯定されている」という実感を持つとか持たないとかいうことのみである。ここにおいて私は徹底的に受動的なのである。私の人生は、つねに全体のほうから位置づけられるしかないのであり、そのような位置づけについ

ての実感のみが、私に可能なものとして残される。

私の人生を包み込む全体が、言語によって、私の人生を承認してくれる場合もある。たとえば、宗教的な共同体が、私の人生を言語によって承認し、肯定してくれるときがそうである。この場合も、肯定する主体は全体の側である。しかしながら、言語によって承認が行なわれるわけであるから、私はその承認の言語を聴くことによって、自分の人生が全体によって肯定され、全体の中に位置づけられたという実感を持つことができやすい。そして私は自分の人生に意味があると判断するであろう。家族や地域社会などの共同体においても同様のことが起きる。また目標や動機を共有する集団から言語によって承認を受け、その集団の中に肯定的に位置づけられる実感を持つということもある。（たとえば受賞、表彰、感謝状など）。

では、私の人生を包み込む全体が、言語によって私の人生を承認するのが不可能な場合はどうなるだろうか。たとえば、超越的な存在はほとんどの場合、言語によって私の人生を承認してはくれない。そこにあるのは沈黙のモードである。あるいは、一般的によく語られるような、「私は子どもをもうけたことによって大いなる人類の流れに参与することができたから、私の人生には意味がある」という言説の場合、私は大いなる人類の流れから言語によって承認されたわけではない。そのような明瞭な承認は欠けているにもかかわらず、私のほうから一方的にそのような実感を抱いているのである。これらの現象の裏面として、全体からの承認の言語がないがゆえに、たとえ私は全体から肯定されたという実感を持てたとしても、どうしてもその実感を完全に確信することができないという事態が生じることがある。これは言語による承認があった場合であっても起きる。共同体の側はそのように言ってくれるのだけれども、それは本当のことなのだろうかという疑いは、いつでも生じる可能性がある。

私が、部分としての「人生の出来事」を肯定する場合には、そういうことは起きない。部分的な出来事をどう見るかという判断に際して揺れることはあったとしても、その判断を下すのは私なのであり、下された判断内容に関して私は明瞭にそれを捉えている。この点に、私が部分人生を肯定する場合と、私の

人生が全体によって肯定される場合との大きな違いがある。

このように、私の人生がそれよりも大きな全体の中へと肯定的に位置づけられているという実感は、往々にして確実な裏付けのないものへと落ちていく危険性をはらんでいる。もしその大きな全体が一人の人間であるならば、私はその人からの承認と肯定、すなわち「愛の言葉」をどこまでも求めてさまようあてどのない求愛者となるだろう。全体からの確実な裏付けがない状態は、いわゆる宙ぶらりんの状態であり、これは人間が何の庇護もなく世界へと投げ出されているという実存主義の感覚と結びつくであろう。このような状態から、確実な裏付けを求めて進む道筋は信仰と呼ばれ、それは様々な多様性のもとで展開する。信仰の対象は超越者である場合もあるし、人間の共同体である場合もあるし、カリスマ的な個人である場合もある。たとえば宗教的実存主義の嚆矢とされるパスカルの『パンセ』は、投げ出された悲惨な状態から、神とともにある栄光へと移行する道筋を描こうとした苦闘の書である。

4　終わりに

本稿では、人生の意味は何を意味しているのかについて、それを二つのカテゴリに区分して考察した。最後に付け加えておきたいのは、人生のある部分の出来事が肯定されないがゆえに、人生の全体が肯定されない場合があり得るということ、そして人生の全体がそれよりも大きな全体によって肯定されるという実感を私が持つことができないがゆえに、私の人生の全体が肯定されない場合があり得るということである。この両方が同時に起きるとき、私はこれまでの自分の人生の全体にまったく意味を見出せないことになる。そして、意味を見出せない人生をずっと死ぬまで生き続けなければならないかもしれない。

そのようなことはあり得ると、私たちは認めなければならない。そのうえで、そのような意味の見出せない人生の価値は、それでもなお他の人間たちの人生の価値や、あり得たかもしれない他の「私の人生」の価値と、けっして比較することはできないというのが私の考え方である。なぜなら、私の人生を生きているその担い手は独在的存在者であり、独在的存在者のあり方は他のどのよう

な存在のあり方とも比較することができないからであり、したがって、そのあり方の価値を何か他のものと比較することもできないからである（この点については Morioka（2015）で論じた）。私はその点に、「人間の尊厳」ではなく「人生の尊厳」が見出されると考えている（この点については、森岡（2014）で論じた）。

以上で述べたことは、まだ荒削りであるので、もっと精細に吟味して書き直す作業を近い将来に行なうことを約束して本稿を閉じたい。

文献一覧

Metz, Thaddeus（2013）. *Meaning in Life*. Oxford University Press.

森岡正博（2011）「誕生肯定とは何か：生命の哲学の構築に向けて（3）」『人間科学：大阪府立大学紀要』6：173 ～ 212

森岡正博（2014）「「人間のいのちの尊厳」についての予備的考察」『Heidegger-Forum』8：32 ～ 69

Morioka, Masahiro（2015）. Is Meaning in Life Comparable?: From the Viewpoint of 'The Heart of Meaning in Life'. *Journal of Philosophy of Life*, 5(3)：50-65

森岡正博（2016）「「誕生肯定」と人生の「破断」を再考する：生命の哲学の構築に向けて（8）」『現代生命哲学研究』第 5 号：13 ～ 27

森岡正博（2017a）「独在今在此在的存在者：生命の哲学の構築に向けて（9）」『現代生命哲学研究』第 6 号：101 ～ 156

森岡正博（2017b）「「人生の意味」の哲学」『現代思想』総特集・分析哲学 2017 年 11 月号：180 ～ 185